目次

第一講　演習問題(1)……p.2
第二講　演習問題(2)……p.6
第三講　演習問題(3)……p.12
第四講　演習問題(4)……p.16

第一講　演習問題(1)

次の文章を読んで、**問一**〜**四**に答えよ。

昔の隠者を思ふに、(1)徳ある人の世にしたふをむつかしがり、仇(あだ)ある人の敵(かたき)を恐れて、さてこそ名をも変へ、かたちをも忍びけめ。徳もなく仇もなき人の、たとへ四条五条に金の看板を出したりとも、訪(と)ふべきよしの人こそ訪はめ、さもなき人は見向きもせざ(a)らむ。幼な遊びのかくれんぼも、尋ぬる鬼のあればこそあれ、さるを浮世に隠れ顔なるぞ、なかなかはづかしき心地ぞする。

そもや我が身の上を言はば、かしこき陰を頼み奉り、官路に立ちしも久しけれど、(2)もとより毒にも薬にもならねば、人にあかれし身とも覚えず。雨露の恵み深くして、すなほなる国に鬼もなければ、世に人に我もあかず。ただ病に悩まされ、今は弓も引きがたく、馬にも乗りがたく、さても武士(もののふ)の名に数まへられんは、南郭(なんくわく)が竽(う)を吹きけんこの身の上のはづかし(b)ければ、老と病を一荷にして、浮世の関は逃れ出でたるなり。しかれば誰をおそれ何を恥ぢて、さのみは逃げも隠れもすべき。

さりとてまた貴顕の門松をくぐり、桃に菖蒲に袖振りはへて、ここの嫁入り、かしこの法事にも連なら(c)んは、いと見苦しう、(3)官事をさへ辞したればいかでかは。

すぎし比（ころ）、いづくの程にか、市中の門柱に「隠居某（なにがし）」と書ける家札を見て、これはとしばらく目さむる心地はしけるが、今や身の上になりぬれば、「隠居したる慶び（よろこび）」とて、親しき限りは言ふに及ばず、疎き（うと）人々にまで訪はれて、門前しばらく市めけば、昨日の浮世よりやかましく、それまた謝せずばあるべからずとて、家を尋ね門叩かせて、「物申（ものまう）」に人を驚かし、隠居の礼にいそがしきは、(4)をかしかりける世のさまかな。

（横井也有『鶉衣』「隠居弁」による）

注

○四条五条――京都の繁華街。
○かしこき陰を頼み奉り――やんごとない主君の恩顧を受けて。
○南郭が竽を吹きけんこの身の上――吹けもしない楽器を吹けるように装って音楽家の中に混じり込んでいた斉の国の南郭のように、技芸もないのに人の中に立ち交じっていた私。
○貴顕の門松をくぐり――権力のある人の邸宅に年始の挨拶に訪問し。
○桃に菖蒲に――「桃」は三月三日の節句、「菖蒲」は五月五日の節句。
○慶び――お祝い。
○物申――「物申す」の略。訪問を知らせるため、外から家の中の人に呼び掛ける声。

問一 傍線（1）（2）を現代語訳せよ。

（1）＝

（2）＝

問二 傍線（3）を、必要な語句を補いながらわかりやすく現代語訳せよ。

問三 傍線（4）は、どういうことを「をかし」と言っているのか、説明せよ。

問四　二重傍線（a）〜（c）について、文法的説明として適切なものを次のうちからそれぞれ選べ。同じものが複数回該当することも有り得る。

ア　助動詞
イ　形容詞の一部
ウ　助動詞の一部
エ　複数の単語（または単語の一部）の連続

（a）＝　　（b）＝　　（c）＝

第二講　演習問題(2)

次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

代明（よあきら）親王の御女の腹に、前少将挙賢（たかかた）・後少将義孝（よしたか）とて、花を折りたまひし君達の、殿（との）うせたまひて、三年ばかりありて、天延二年甲戌の年、疱瘡（もがさ）おこりたるに患（わづら）ひたまひて、前少将は、あしたにうせ、後少将は、夕にかくれたまひにしぞかし。一日がうちに、二人の子を失ひたまへりし母北の方の御心地、いかなりけむ、いとこそかなしくうけたまはりしか。

かの後少将は、義孝とぞ聞こえし。御かたちいとめでたくおはし、^A年頃きはめたる道心者（だうしんざ）にぞおはしける。病重くなるままに、生く^アべくもおぼえたまはざりければ、母上に申したまひけるやう、「おのれ死にはべりぬとも、とかく例のやうにせさせたまふな。しばし法華経誦（ず）じたてまつらむの^a本意はべれば、かならず帰りまうで来^イべし」とのたまひて、方便品（はうべんぼん）を読みたてまつりたまうてぞ、うせたまひける。^①その遺言を、母北の方忘れたまふ^ウべきにはあらねども、ものも覚えでおはしければ、思ふに人のしたてまつりてけるにや、枕（まくら）がへしなにやと、例のやうなる有様どもにしてければ、え帰りたまはずなりにけり。後に、母北の方の御夢に見えたまへる、

しかばかり契りしものを渡り川かへるほどには忘るエべしやは

とぞよみたまひける、いかに悔しく思しけむな。

さて後、ほど経て、賀縁(がえん)b阿闍梨と申す僧の夢に、この君達二人おはしけるが、兄前少将、いたうもの思へるさまにて、この後少将は、いと心地よげなるさまにておはしければ、阿闍梨、「君はなど心地よげにておはする。母上は、君をこそ、兄君よりはいみじう恋ひ聞こえたまふめれ」と聞こえければ、Bいとあたはぬさまの気色にて、

②しぐれとは蓮(はちす)の花ぞ散りまがふなにふるさとに袖濡らすらむ

など、うちよみたまひける。さて後に、小野宮(をののみや)の実資(さねすけ)のおとどの御夢に、おもしろき花のかげにおはしけるを、うつつにも語らひたまひし御仲にて、「いかでかくは。いづくにか」とめづらしがり申したまうければ、その御いらへに、

昔は契りき　蓬莱宮(ほうらいきゅう)の裏(うち)の月に

今は遊ぶ　極楽界(ごくらくかい)の中(うち)の風に

とぞのたまひける。極楽に生まれたまへるにぞあなる。③かやうにも夢など示したまはずとも、この人の御往生、疑ひ申す

ォべきならず。

（『大鏡』による）

（注）

○代明親王の御女—醍醐天皇の孫。恵子女王。
○花を折りたまひし—華やかな容姿であることのたとえ。
○殿—藤原伊尹（九二四～九七二）。挙賢・義孝の父。
○天延二年—九七四年。
○皰瘡—天然痘。
○枕がへし—枕を北向きに変えること。
○賀縁—俗姓・生没年未詳の僧。
○小野宮の実資のおとど—右大臣藤原実資。
○蓬萊宮—中国の伝説において、はるか東方の海上に浮かぶ蓬萊山にあるという宮殿。ここでは宮中のたとえ。

問一　波線部「あした」を、適切な漢字に直しなさい。

問二　傍線部ａ「本意」、ｂ「阿闍梨」の読みを、現代かなづかいで答えなさい。

ａ＝

ｂ＝

問三　傍線部Ａ「年頃きはめたる道心者にぞおはしける」、Ｂ「いとあたはぬさまの気色」を、それぞれわかりやすく現代語訳しなさい。

Ａ＝

Ｂ＝

問四　二重傍線ア〜オのうち、「意志」の意味で用いられているものを一つ選んで、記号で答えなさい。

問五　傍線部①「その遺言」について、次の問いに答えなさい。

（1）どのような内容か、三十字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

（2）義孝は、なぜそのような遺言を母に託したのか。その理由を簡潔に答えなさい。

問六　傍線部②「しぐれとは蓮の花ぞ散りまがふなにふるさとに袖濡らすらむ」について、次の問いに答えなさい。

（1）「蓮の花ぞ散りまがふ」とは、どのような場所の情景を示したものか。一語で答えなさい。

（2）「なにふるさとに袖濡らすらむ」とは、誰の動作か。本文中の語で答えなさい。

問七　傍線部③「かやうにも夢など示したまはずとも」における「夢」とは、この場合、どのような役割を担っているか。「……という役割」につながるように、本文全体の内容に即して説明しなさい。

第三講　演習問題(3)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

後嵯峨法皇の、御熊野詣(みくまのまうで)ありける時、伊勢国の*夫(ぶ)の中に、本宮の音無河といふ所に、梅の花の盛りなりけるを見て、よみける。

A　おとなしにさきはじめけるうめのはなにほはざりせばいかでしらまし

夫が歌には、いみじき秀歌なるべし。

この事、御下向の時、道にて自然(じねん)に聞こしめして、*北面の下臈(げらふ)に仰せて(1)召されにけり。北面の者、馬にてあちこち打ちめぐりて、「本宮にて、歌よみたりける夫は、いづれぞ」と問ふに、「これこそ、件(くだん)の夫にて候へ」と、そばにて人申しければ、「仰せなり。参るべし」と(2)言ひける、かへりごと、

B　はなならばをりてぞひとのとふべきになりさがりたるみこそつらけれ

さて、(a)かへりごとにも及ばで、おめおめと馬より下りて、具して参りぬ。事の子細聞こしめされて、御感(ぎょかん)ありて、「何事

にても所望申せ」と仰せ下さる。「言ひ甲斐（がひ）なき身にて候へば、何事の所望か候ふべき」と、申し上げけれども、「(b)など分（ぶん）に随（したが）ふ所望なかるべき」と仰せければ、「母にて候ふ者を、養ふほどの御恩こそ、所望に候へ」と、申しければ、百姓なりけるを、かの*所帯の公事、*一向御免ありて、*永代を限りて、違乱あるまじき由の御下文（おんくだしぶみ）給はりて、(3)下りけるとぞ。(c)わりなき*勧賞（けんじやう）にこそ。百姓が子なりけれども、*児（ちご）だちにて、和歌の道心得たりけるとぞ、人申し侍りし。

（『沙石集』による）

＊夫——労役のために徴発された人。
＊北面の下臈——院の御所を守る下級武士。
＊所帯の公事——税。
＊一向御免——全て免除すること。
＊永代を限りて——子々孫々に至るまで。
＊勧賞——褒美。
＊児だち——稚児として育てられた人。

問一 二重傍線部（1）（2）（3）の動作主（主語）を次のア〜オから選び、記号で答えなさい。

ア 法皇　イ 夫　ウ 北面の下臈　エ 人　オ 語り手（作者）

（1）＝　（2）＝　（3）＝

問二 傍線部（a）（b）を現代語訳しなさい。ただし（a）は、動作主（主語）と動作の対象とを補って訳すこと。

（a）＝

（b）＝

問三 Aの歌を、掛詞の意味を示しながら現代語訳しなさい。

問四　Ｂの歌について次の問いに答えなさい。

①　この歌には三か所に掛詞が使われています。すべて指摘しなさい。

②　①の掛詞をふまえて、この歌を詠んだ夫の心情を説明しなさい。

問五　傍線部（ｃ）は誰の、どのようなことに対する、どのような気持ちを表しているか、わかりやすく説明しなさい。

第四講　演習問題(4)

次の文章は『たまきはる』の一節で、体調を崩していた女院に作者がお仕えしている場面から始まる。読んで設問に答えよ。

その夜より御足のあさましく冷えておはしますに、ものもおぼえず。御祈りも何事も心のままならん所にて思ふさまに申さばやと、心一つを砕けど、おほかた聞き入るる人もなし。この例ならぬ御事のはじめ、人は何ともイ思ひ分かざりしほどより、人候はぬ間に近く参りたれば、「や、いかがせんずる」と仰せ事ありし事のたびたびありしを、「ただ例ならぬほどは、さこそおぼえ候へ」など、ロことなきやうにのみ申ししかば、またとかく仰せらるる事もなかりし。後に思へば、いかに思しめしけるにか、また御物の気（け）などのことばにやと、かたがたハあらぬさまにも申して聞かでと、つくづくと悔しき事ぞせんかたなき。

霜月になりては、立たせおはしますことのなかりしを、ただの御美しさのせめて驚くべくもなき御気色に、人々はさらにも言はず、我が心だに、かばかりとも思ひまゐらせぬになどとおぼえて、「御前には、ゆゆしく御心劣りのせさせおはします。さまでの御事も候はぬに、ニなどかくえ立たせおはしまさぬ」と申ししを、六日のつとめても、御障子の御あとへ出でさせおはしますとて、やをらゐざりて御覧じ合はせて、ホ「心劣りの事」とてうち笑ませおはしましたりし恋しさの、ただこれほど

の事もかずかずに、いかにせんいかにせんと心を砕くことのみ尽きせぬなり。大女院の限りの宮仕へしたる身にて、手をえかけまゐらせねば、我が手をまゐらせて、「これ探らせおはしませ」とて、御手の温かさのほどを知りまゐらせんと思ひしに、七日の申(さる)の時ばかりの後は、我が身も心もなくなりにしかば、言ふかひもなし。

へ　いかにして思ひも出でじ見果ててしいとふべき世の憂さの限りを

注

驚くべくもなき御気色——驚く必要もない、心配する必要もないご様子。

心劣り——意気地のない、気が弱いこと。

ゐざりて——座ったままで動いて。

大女院の限りの宮仕へ——大女院は女院の母。作者が大女院の臨終の際にお仕えしていたことを指す。

手をえかけまゐらせねば——憚(はばか)りがあって直接に看病できずにいたことを指す。

問一　傍線部イ・ロ・ニを現代語に改めよ。

イ＝

ロ＝

ニ＝

問二　二重傍線部ハについて、「聞かで」とは何を聞き入れなかったのか、わかりやすく説明せよ。

問三　二重傍線部ホとあるが、誰のどのような態度であるか。その言動の意図を汲みつつ五〇字以内で説明せよ。

問四　二重傍線部へについて、何を「思ひも出でじ」というのか。具体的に三〇字以内で説明せよ。

模範解答

第一講

〔模範解答〕

問一（１）人徳のある人が俗世に慣れ親しむことを煩わしがり

（２）もともと害もないが役にも立たないどうでもいいものなので、人に認められた身とも思われない

問二（隠居した上に）武士としての役所の勤めまでも辞めたので、どうして世間の人と交わったりしようか、いや、しない。

問三 隠居をして静かに暮らすはずが、かえってたくさんの人に訪ねられて、隠居前よりもやかましい状態になり、また、そのお礼をしなければならなく、忙しくなったこと。

問四（ａ）エ　（ｂ）イ　（ｃ）ア

〔現代語訳〕

昔の隠者を思うと、人徳のある人が俗世に慣れ親しむことを煩わしがり、恨みを負っている人が敵を恐れて、それで名前も変え、姿を隠したのだろう。人徳もなく恨みも負っていない人が、たとえ四条五条〔＝京都の繁華街〕に金の看板を出したとしても、訪ねようというつもりの人は訪ねるだろうが、そうでもない人は見向きもしないだろう。子どもの遊びのかくれんぼも、探す鬼がいるからよいが、（探す人もいないのに）それなのに俗世で隠れるような様子であるのは、かえって恥ずかしい気がする。

それにしてもまあ自分のことを言うならば、やんごとない主君の恩顧を受けて、役人として勤めたことも長いが、もともと毒にも薬にもならない（どうでもいいものな）ので、人に認められた身とも思われない。雨露の恵みが深くて、素朴な国に鬼もいないので、世間にも人にも私も飽きてはいない。ただ病気に悩まされて、今では弓も引きにくく、馬にも乗るのが難しく、それでも武士の一員に数えられるようなことは、（吹けもしない楽器を吹けるように装って音楽家の中に混じり込んでいた斉

の国の）南郭が芋を吹いたとかいう（のと同様に、技芸もないのに人の中に立ち交じっていた）私が恥ずかしいので、年老いたことと病気を一つの荷物にして、俗世の関所は逃れ出た〔＝隠居した〕のである。そうなので誰を恐れ何を恥ずかしがって、そうむやみに逃げ隠れする必要があろうか、いや、ない。そうかといってまた権力のある人の邸宅に年始の挨拶に訪問し、桃の節句に端午の節句に袖を振って、ここの嫁入り、あそこの法事にも列席するようなことは、たいへん見苦しく、（武士としての）役所の勤めまでも辞めたのでどうして世間の人と交わったりしようか、いや、しない。

かつて、いつ頃であったか、市中の門柱に「隠居某」と書いた表札を見て、これは（よい）としばらく目が覚める気はしたが、今は自分のことになったので、「隠居したお祝い」と言って、親しい者は言うまでもなく、交わりが浅い人々にまで訪問されて、門前がしばらく市場のような賑わいなので、昨日の俗世よりやかましく、それもまた答礼しなくていいわけはないというので、家を訪ね（お供の人に）門をたたかせて「ごめんください」（の声）で人を驚かせ、隠居の作法に忙しいのは、おもしろかった世の様子だなあ。

第二講

〔模範解答〕

問一　朝

問二　a　ほい　　b　あざり〔あじゃり〕

問三　A　長年この上なく熱心な仏道修行者でいらっしゃった

　　B　たいそう納得のいかない様子

問四　イ

問五　(1)　自分が死んでも普通の死者にするような葬儀はしないでほしい。(二十九字)

　　(2)　死んでも現世に戻り、法華経を読誦したいという本願があるため。

問六　(1)　極楽　　(2)　母北の方

問七　義孝が熱心に仏道修行に励んだ結果、たしかに極楽往生したことを示すという役割。

〔現代語訳〕

代明親王の御女〔＝恵子女王〕が生んだ、前少将挙賢・後少将義孝といって、華やかな容姿でいらっしゃった若君たちが、殿〔＝父伊尹(これまさ)〕が亡くなりなさって、三年ぐらいして、天延二年〔＝九七四年〕甲戌(きのえいぬ)の年、天然痘が流行した時に患いなさって、前少将は、朝に亡くなり、後少将は、夕方に亡くなりなさったよ。一日のうちに、二人の子を亡くしなさった母北の方〔＝恵子女王〕のお気持ちは、どうであっただろうか、実に悲しくお聞きしました。

あの後少将は、義孝と申し上げた。ご容貌がたいそう美しくいらっしゃり、長年この上なく熱心な仏道修行者でいらっしゃった。病気が重くなるにつれて、生きのびることができそうとも思いなさらなかったので、母上に申し上げなさったことには、「私が死にましたとしても、あれこれと通例の（葬儀の）ようにしなさいますな。しばらく（現世にいて）法華経を読誦申し上げ

ようという本願がありますので、必ず（この世に）帰ってくるつもりです」とおっしゃって、（法華経の）方便品を読み申し上げなさって、亡くなりなさった。その遺言を、母北の方が忘れなさるはずはないが、茫然自失でいらっしゃったので、思うに誰かがし申し上げたのであろうか、枕を北向きに変えたりなにやかやと、通例のような有様にしたので、（後少将はこの世に）帰りなさることができなくなった。後に、母北の方の夢に（後少将が）見えなさった（時）、

　しかばかり……＝あれほど約束したのに、三途の川から帰ってくる間に（約束を）忘れてよいものか、いや、よくない

と詠みなさったが、どんなに悔しく思いなさっただろうか。

　さてその後、しばらく経って、賀縁阿闍梨と申す僧の夢に、この若君たち二人がいらっしゃったが、兄の前少将は、ひどく物思いに沈んでいる様子で、この後少将は、たいそう気分がよさそうな様子でいらっしゃったので、阿闍梨が、「あなたはどうして気持ちよさそうでいらっしゃるのか。母上は、あなた様を、兄君よりもたいそう恋い申し上げなさるようだ」と申し上げたところ、たいそう納得のいかない様子で、

　しぐれとは……＝時雨とは（極楽では）蓮の花が散り乱れる（ことである）。なぜ故郷（の母）は涙に袖を濡らして（悲しんで）いるのだろうか。

などと、詠みなさった。さてその後、小野宮の実資の大臣（＝右大臣藤原実資）の御夢で、（後少将が）美しい花の陰にいらっしゃったので、在世中でも親しく交際していらっしゃった仲で、「どうしてこんなところに。どこに（今いるの）か」と珍しく思い申し上げなさったところ、そのお返事に、

　昔は契りき……＝昔は親しく交際した　宮中で月を眺めて。今は（一人で）遊ぶ　極楽世界で風に吹かれて。

とおっしゃった。極楽往生なさったのであるようだ。このように夢などで示しなさらなくても、この人の極楽往生は、疑い申し上げるはずがないのだ。

第三講

〈模範解答〉

問一　（1）ア　（2）ウ　（3）イ

問二　（a）北面の武士は人夫に返歌することもできないで、ふがいなく馬から下りて、人夫を連れて法皇のもとに参上した。

（b）どうして身の程に応じた望みがないだろうか、いや、あるはずだ。

問三　音無河で音も立てずに咲き始めた梅の花は、香りが匂わなかったならば、どうしてそこに咲いているとわかっただろうか、いや、わからなかっただろう。

問四　①「をり」に「（花を手）折り」と「（馬を）下り」、「なりさがり」に「（実が）生り下がり」と「（身分が）成り下がり」、「み」に「実」と「身」を掛けている。

②自分の身分が低いために、馬から下りない状態の北面の武士から話しかけられる我が身がつらいという心情。

問五　作者の、伊勢国の人夫がすばらしい歌を詠んだことにより、後嵯峨法皇から子々孫々まで税を全て免除されたことに対する、思いがけないほど大きい褒美だと驚く気持ち。

〈現代語訳〉

後嵯峨法皇が、御熊野詣をされたとき、伊勢国の人夫〔＝労役のために徴発された人〕の中に（いた人が）、本宮の音無河という所で、梅の花が満開であったのを見て、詠んだ（歌）。

おとなしに…＝音無河で音も立てずに咲き始めた梅の花は、香りが匂わなかったならば、どうして（そこに咲いていると）わかっただろうか、いや、わからなかっただろう。

人夫の歌にしては、すばらしい秀歌であるだろう。

このことを、（法皇が御熊野からの）お帰りのとき、道中で自然と聞きなさって、北面の武士（＝院の御所を守る下級武士）におっしゃって（その人夫を）呼び寄せなさった。北面の武士は、馬であちらこちらを回って、「本宮で、歌を詠んだ人夫は、どこだ」と尋ねると、「これが、その人夫でございます」と、傍らで人が申し上げたので、「ご命令である。参上せよ」と（北面の武士が）言った、その返事（として人夫が詠んだのは）、

はなならば…＝花であれば手折ってから人が話しかけるように、私が栄えていたならば馬から下りてあなたは私に話しかけるはずなのに、垂れ下がってなる実のように、落ちぶれた我が身が恨めしい。

そうして、（北面の武士は人夫に）返歌することもできないで、ふがいなく馬から下りて、（人夫を）連れて（法皇のもとに）参上した。（法皇は）事の経緯を聞きなさって、感心なさって、「どんなことでも望みを申せ」とおっしゃる。（人夫は）「取るに足りない身でございますので、どんな望みがございましょうか、いや、ございません」と、申し上げたが、（法皇が）「どうして身の程に応じた望みがないだろうか、いや、あるはずだ」とおっしゃったところ、（人夫は）「母でございます者を、養う程度の御恩恵が、望みでございます」と、申し上げたので、農民であったが、その税を、全て免除して、子々孫々に至るまで、違反してはならない旨の御下文を（人夫は法皇から）いただいて、（伊勢国へ）下ったということだ。とても素晴らしい褒美である。農民の子であったが、稚児として育てられた人で、和歌の道を心得ていたと、人が申しました。

第四講

〔模範解答〕

問一　イ　判断できなかったとき
ロ　何でもないようにばかり申し上げたので
ニ　どうしてこのように立ちなさることができないのか

問二　女院の、病気が苦しく、どうしたらよいのかと何度も訴えた言葉。

問三　女院の、作者に意気地がないと言われたので、苦しくても心配させずに気丈に振る舞おうと微笑む態度。（四十七字）
〔別解〕女院の、作者の言葉の厳しさを皮肉として言うことにより暗に示しつつ、それを笑って受け入れる態度。
（四十七字）

問四　お仕えする方たちの死という無常な世のこのうえないつらいこと。（三十字）

〔現代語訳〕

その夜から（女院の）御足が驚きあきれるほど冷えていらっしゃるので、どうしてよいかわからない。お祈りも何事も思い通りであるところで思うように申し上げたいと、（自分の）心一つを痛めるが、（病状を深刻に思わないため）まったく聞き入れる人もいない。この病気である御事のはじめ、人は何とも判断できなかったときから、人が伺候しない間に（私が）近く参上したところ、「ああ、どうしたらよいのか」と（女院の）お言葉があったことがたびたびあったが、（私が）「ただ病気のときは、そのように思うのです」などと、何でもないようにばかり申し上げたので、（女院は）再びあれこれおっしゃることもなかった。後で思うと、（女院は）どれほど（つらく）思いなさったであろうか、また御物の怪などの言葉であろうかと、あれこれ別事のように（紛らし）申し上げて（女院の言葉を）聞かないでと、ひたすらに悔やまれることはどうしようもない。

十一月になっては、（女院は）立ちなさることがなかったが、いつもの美しさでひどく心配する必要もないご様子に、人々

は言うまでもなく、私の心さえ、これほど〔＝立てないほど病気が重い〕とも思い申し上げないのになどと思われて、「御前におかれては、ひどく御意気地がなくていらっしゃる。それほどの御事もございませんのに、どうしてこのように立ちなさることができないのか」と申し上げたところ、六日の早朝も、（女院は）御障子のお後ろへお出でになるということで、そろそろと座ったまま動いて（私と）視線を合わせて、「意気地がないこと」と言って笑いなさった恋しさが、ただこれほどのことでもあれこれ、どうしようかどうしようかと心を痛めて悩むことばかりが尽きないのである。（私は）大女院〔＝女院の母〕の臨終の際にお仕えしていた身で、憚りがあって直接に看病し申し上げることができないので、私の手を（女院に）差し出し申し上げて、「これを探りなさいませ」と言って、御手の温かさの具合を知り申し上げようと思ったが、七日の申のとき〔＝午後四時頃〕ぐらいの後（に崩御したとき）は、私の身も心もなくなってしまったので、どうしようもない。

　いかにして…＝なんとかして（お仕えする方たちの死を）思い出すまい。見尽くしてしまった、厭うべきこの世のつらさの限りを。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。